

まほろん

Shirakawa since 2007



通信



◆特集1◆
土器から時を測る

◆特集2◆
カラムシから布をつくろう

■シリーズ最新遺跡発掘調査情報4■

■コラム■

なかむろうち
伊達市中室内遺跡

つき
「坏」のはなし



土器から 時を測る

「土器」から「時=年代」を明らかにしていく研究を紹介します。どきどき間違いなし！

文：三浦 武司（専門学芸員）

「**土器**」から「**時**」を測るとはなんのことでしょう。

文字が無い時代や文字による資料が少ない時代の年代を知るには、発掘調査などで見つかった土器のまともりから、ボクたち学芸員は年代を推測します。土器は、時代や地域により形や文様が変化することから、考古学において新旧を判別するものさしとなります。



縄文時代早期の土器
(白河市泉川遺跡)



縄文時代前期の土器
(会津美里町鹿島遺跡)



縄文時代中期の土器
(天栄村桑名邸遺跡)



弥生時代後期の土器
(湯川村桜町遺跡)

もう1つ。「**土器**」から「**時**」を測る方法があります！

まほろんで、5か年にわたって行った放射性炭素年代測定です。土器に付着している炭化物を調べることで、その使用年代や製作年代を明らかにできる方法です。土器は、主に煮炊きに使用されていたため、炭化物が付着しやすく、当時の生活痕跡をよくとどめています。年代は数値として表されるので、土器が使われた年代を、世界史の年表に位置づけることが可能になるのです。

まほろんでは、8月25日（日）まで、企画展「**時を測る－縄文・弥生時代の年代－**」を開催しています。この企画展では、まほろんに収蔵されている縄文土器や弥生土器など160点の年代を測定した土器と測定結果を展示しています。さらに、樹齢約1800年の屋久杉標本、福井県水月湖の堆積の様子が見られる年縞コアなど年代測定に関連する資料も展示しています。まほろんで、**土器**から**時**を感じて、**ドキドキ**してみませんか？

表紙の1枚

去年までのゴールデンウィークは「まほろんまつり」を特定の日に開催していましたが、今年のゴールデンウィークは4月27日から5月6日まで「ゴールデンウィーク特別体験」として10日間実施しました。勾玉・鏡・剣づくりといった三種の神器にちなんだ石製模造品づくり、古墳時代の衣装体験などを、多くの皆様楽しんでいただきました。

カラムシから 布をつくろう

実技講座「カラムシコースター」づくりについてご案内します。

文：廣川 紀子（主任学芸員）

まほろんでは、カラムシという植物からの布づくりの体験を行っています。カラムシとはイラクサ科の多年草で、日本では苧麻・青苧・苧とも呼ばれています。カラムシは各地に自生し、春先に芽吹いたものが初夏には人の背丈ほどに成長します。まほろんの体験では、その成長に合わせて刈り取り、茎の部分から繊維を取り出し、糸に紡いで布に仕上げています。

カラムシと人との関わりは古く、秋田県五城目町に所在する中山遺跡からは、縄文時代晩期の漆漉しに利用された布片が見つかっています。弥生時代になると、『魏志倭人伝』にはカラムシの栽培と織布に関する記載が認められます。そして、奈良時代に建立された正倉院では、保管される麻布のほとんどがカラムシを原料としています。

麻布の原料にはいくつかの植物が知られています。日本では主にラミー（苧麻）＝カラムシと、ヘンプ（大麻）が使われています。新元号の出典となった『万葉集』にも30首ほどに麻が詠まれています。かつて日本で麻といえばヘンプ、大麻のことで、カラムシは別に呼称されることが多いようです。他の原料と比較しても、カラムシの繊維は色も白く、強靱で長さがあり、太さにばらつきが少ないことから、織機を利用した布づくりに適しています。

さて今回の実技講座では、そのようなカラムシを使って、縄文時代の布づくりを目指し、越後アンギンを参考に布をつくります。先人たちの知恵や技術に触れてみませんか。



カラムシが生育する夏季限定の体験となります。皆様のご参加をお待ちしています。

- ◆第1回 7月21日（日）10:00～15:00 [刈り取り、おひき]
- ◆第2回 7月28日（日）10:00～15:00 [糸づくり]
- ◆第3回 9月1日（日）10:00～15:00 [布づくり]

※体験料500円。募集定員16名。中学生以上で、全3回の参加が可能な方。詳細はお問い合わせください。

「杯」のはなし

文：山元 出（副主幹）

遺跡から出土する土器のうち、現代のお椀より少し浅い形のもの、「つき」と呼んでいます。文字としては「杯」や「坏」が当てられます。「杯」という字には「さかづき」という意味があるので、器の形とぴったり合います。ところが、「坏」という文字は、もともと「低い山」や「焼いていない陶器・瓦」という意味で、器の形の意味は持っていませんでした。

とはいうものの、『万葉集』の大伴旅人の歌に、「駿無物乎不念者一坏乃濁酒乎可飲有良」(駿(しるし)なきもの思(おも)はずは一坏(ひとつき)の濁(にご)れる酒を飲むべくあるらし)とあります。日本では古来より「坏」の字が「さかづき」の意味として用いられていたようです。おそらく木の「さかづき」が「杯」だったら、土器の「さかづき」は「坏」だと昔の人が考え、この字を当てたのでしょうか。

こんな想像ができるのも歴史の面白みだと思います。

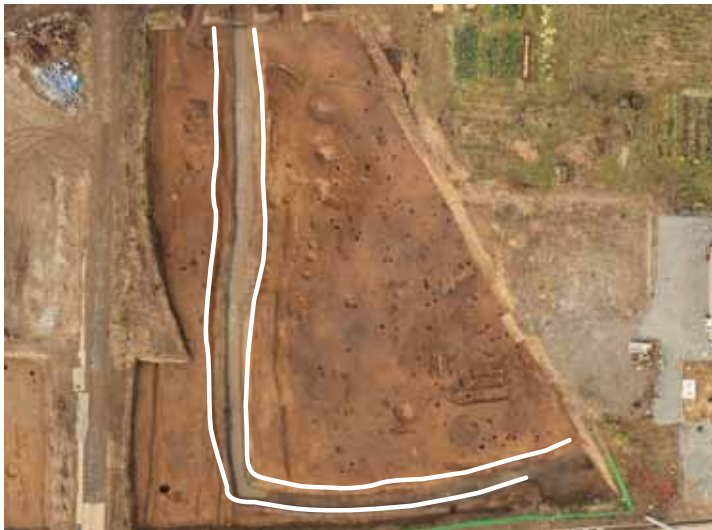
伊達市 中室内遺跡

伊達氏の居城と伝わる遺跡の近くで見つかった屋敷跡の紹介です。

文：鶴見 諒平（副主任学芸員）



見つかった風炉の破片



見つかった堀跡（白線の箇所、写真上が北）

今回紹介するのは2017年度に調査された、伊達市保原町に所在する中室内遺跡です。相馬福島道路の建設に伴い調査が行われました。場所は福島市と伊達市の市境付近にある高子沼から北東に1.4km程のところにあります。遺跡は阿武隈川の旧河道の南側にある自然堤防の上にあります。

調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡、古代～中世の掘立柱建物跡、堀跡・溝跡なども見つかっています。中でも、注目されるのは、中世の堀跡です。この堀跡は調査区の中でその一部がL字状にみつかりましたが、もともとは方形になっていたものと推定されます。

見つかった堀跡の規模は、長さが南北約44m、東西約33m、幅は3.2～4.9m、深さは最大で1.3mというものでした。堀跡で区画された内側からは、3棟の掘立柱建物跡や多くの柱穴が見つかっており、この堀で区画された内側が屋敷地として利用されていたこともわかりました。堀跡からは15世紀以降の五輪塔の一部、柱穴からはお茶に使う道具である風炉の破片などがみつかっています。また、この堀跡は

明治10～20年代に作成された地籍図に描かれていて、その後も昭和30年代頃まで窪んだ状態のまま残り、水路として利用されていたこともわかっています。

遺跡から西に700mの場所には、伊達朝宗が築いたと伝わる高子岡館跡があります。このほかに伊達市の梁川城跡や桑折町西山城跡など、付近には伊達氏との関係が深い場所が多くあります。

この中室内遺跡で見つかった屋敷跡も、もしかすると伊達氏と関連があるものかもしれません。

まほろん掲示板

6/15 (土)～8/25 (日)

企画展「時を測る－縄文・弥生時代の年代－」

7/5 (金) 文化財保護行政実務者研修

7/7 (日) 第2回まほろん森の塾

7/21 (日)・28 (日)・9/1 (日)

カラムシコースターづくり

7/27 (土) 第2回館長講演会

8/4 (日) 土器づくり初級編

8/9 (金) 文化財保護行政実務者研修

8/12 (月) 文化財講座

第2回文化財講演会

8/10 (土)～18 (日) 夏休み特別体験

8/25 (日) 縄文時代のオカリナづくり

9/28 (土) 第3回館長講演会

9/28 (土)～12/15 (日)

企画展「渦文－時を越える文様－」

10/6 (日) 第3回まほろん森の塾

10/12 (土) 第3回文化財講演会

★行事名・日程は変更になる場合があります。

編集後記

今号は、令和年間が始まって初めてのまほろん通信です。開催中の企画展では、水月湖の年稿や屋久杉円盤など、普段は見られない貴重なものを展示しています。ぜひ、まほろんに足を運んでご覧になってみてください。

まほろん
通信
vol. 72

令和元年7月4日発行

開館時間 9:30～17:00 (入館は16:30まで)
休館日 月曜日 (月曜日が祝日・休日の場合にはその翌日ですが、GWとお盆期間中は開館します) / 国民の祝日の翌日 (土・日曜日に当たる場合は開館 / 年末年始 (12月28日～1月4日))
入館料 無料 (体験学習の内容によっては、材料費が必要な場合があります。)

お問い合わせ



福島県文化財センター ● 白河館

〒961-0835 福島県白河市白坂一里段 86

☎ 0248-21-0700

fax 0248-21-1075

ホームページ [まほろん](#) [検索](#)

